

---

# 虫

ゲーフィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虫

### 【Nコード】

N5018A

### 【作者名】

グーフィー

### 【あらすじ】

一匹の虫が、生死をかけた旅に出る。

(前書き)

よろしくお願ひします。

これは、虫の世界のお話です。人間にとってはちっぽけな存在ですが、僕たちもそれなりにがんばってます。

20??年 夏

僕たちの世界は活気で満ち溢れている。

ただし、僕一人をのぞいては……

僕のテンカ。てんとう虫だ。自分で言うのはなんだけど、人一倍怠け者だ。

いつも鳥に襲われないように、木の影に隠れて、お腹が空くと、他の虫

が取ってきた餌をこっそりくすねている。

そういう生活を生まれてから3ヶ月間やってきたのだ。そして

冬

……「みんなどこへいったんだ？」

僕の周りには誰もいない。どうやらみんな冬眠してしまったようだ。

……

「まあ、いいや。」

僕は眠りについた。

数時間後……

僕はお腹の鳴る音で目覚めた。

「腹へったな。」

僕は食べ物の調達に行くことにした。木の上から地面の下を探し回った。

でも、どこにも食べ物がない。あるのは僕が万が一のために備えておいた

アブラムシの干物くらいだ。

でもこんままでは、僕は飢えて死んでしまう。

そして、僕は決心した。「よし！旅にしよう。」

僕は早速船を作り始めた。木の枝を数本折ってそれをツタで巻く。その上に大きな葉っぱを枝で固定し、早くもお粗末なヨットの完成。僕は船に乗り込み葉っぱの帆で風を操りながら。この後起こることとわからないまま進んでいった。

最初は楽しかった。太陽の光が心地いい。(冬だから)景色も海だけしかみえないけど、なかなかいいもんだ。

一日後……

なんかきついし風が冷たい。

二日後……

ついに食料が尽きた。しかもヨットも壊れた。世界ってこんなに広いのか。

僕はしかたなく飛んでいくことにした。数時間後一隻の船を見付けた。

心も体も疲れきった僕は迷わず船に乗り込んだ。

僕はその船で眠りについた。………なんだろう。さわがしいな。

目を開けると大量の魚が僕の目の前にいた。

魚は暴れまわっている。やばい、このままでは魚に潰されてしまう。

僕は急いでとびあがった。間一髪のところ、魚の攻撃をかわすことに成功した。

「なんだよ、せっかく気持ちよくねむってたのに。」

僕は悪態をつきながら船室の中に入った。そしてその中にある毛皮のような物のなかに入ってまた眠りについた。

目が覚めると、今度はなぜか家の中にいた。どうやら僕はかばんに入り込んだらしい。かばんの外にでると、三人の人間が食事をと

っている。

そういえばお腹が空いたなあ。

僕は食べ物のところへ飛んで行き、野菜にかぶりついた。

「ああ・・・うまい」

そのとき、突然後ろの方から雄叫びが聞こえてきた。

振り向くと、一人の少女が、意味不明な言葉（人間の言葉はわからない）

を叫びながら、手を振り下ろしてくる。

僕はそれを、ひらりとかわした。気付くと、他の二人も、僕に

向かって、手を振り下ろしてくる。僕はそれもかわして、台所に

逃げ出した。そして、着地するやいなや上から水の固まりが

落ちてきた。

「うわー！ー」

そして僕は水にのみ込まれた。

.....

.....ぶはあ

死ぬかとおもった。僕は壁をよじ登り体を乾かした。今度は下水道  
に来てしまったようだ。

体が乾いたところで出発した。少し歩くと、一匹のねずみがいた。

よし！こいつを利用するか。

僕はねずみの背中に飛び移り、また体を休めながら移動していった。  
ねずみはすごい速さで突き進んでいく。

そして、たどり着いた先は、ねずみのすみかだった。

そこには、数匹のねずみがいた。しかも、かなりの空腹の

ようだ。僕は恐怖で滑り落ちてしまった。とうぜん僕の存在に、ね  
ずみ

は気付いた。僕は飛び上がった。でも、天井が低いせいで、ねずみ

がとどくところまでしか飛ぶことができない。しょうがなく僕は地面におりた。そして、ゴキブリのように速く地面をはっていった。「うおー」

しかし、ねずみの方が速かった。

だから、僕は賭けに出た。僕はまたしても、あの水路にとびこんだのだ。

「ぶばおおあああああああああああああ」

そして僕は、水と一緒に町の噴水から、地上に飛び出した。

「はあ、はあ、助かった。」

僕は濡れた体を引きずって歩き始めた。

歩き始めて十数時間後………空港に到着した。

僕は早速飛行機に飛んでいった。着いたさきは、南の島国。

最高だ。こんなところに来れるとは。僕は運がいい。

僕は飛行機を降りて木の方に飛んでいった。

もう、腹が減って死にそうだ。なんか食い物ないかなー

――

そして、僕は木に止まった。周りを見ると、ついに見つけた。

真正正銘のアブラムシだ。僕は急いでアブラムシのもとへ駆けつけた。

そして、アブラムシを食べ始めた。

「ああ、この味なつかしい。」

こうして、僕の食べ物を求める旅は終止符をうった。

だが、これだけは言える。僕のたびはまだまだ終わらない。











## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5018a/>

---

虫

2011年1月15日23時49分発行